氏　　名	：	木内　隆生
専攻分野の名称	：	博士（教育学）
学 位 記 番 号	：	博乙第 80 号
学位授与年月日	：	平成２７年３月１７日
学位授与の要件	：	学位規則第４条第２項該当　論文博士
学 位 論 文 名	：	思春期青年の協同性プログラムに関する開発的研究 －教科外教育における指導の在り方に着目して－
論 文 審 査 委 員	：	（主査）　教授　犬塚　文雄 （副査）　教授　岩川　直樹　　教授　平野　朝久 　　教授　髙木　展郎　　教授　堀内　かおる

学 位 論 文 要 旨

本論文では，現代の若者における社会不適応の問題を，中学・高校段階での人間関係構築における躓きの結果と捉えている。そこで思春期青年（定義：中学３年生～大学１年生相当）に対して，教科外教育（定義：道徳・総合的な学習の時間・特別活動）と大学初年次入門科目の授業時間を用いて，人間関係づくりを深化・促進するための協同性プログラムを開発し，その実験授業の効果検討を行うこととした。さらに授業者である教師集団の協同性への認識とワーカー教師としての実践的指導力を高めることまでが本論文の目的である。

第Ⅰ部は理念的研究である。第１章（研究１）と第２章（研究２）とで構成されている。第１章（研究１）では，毎年 20 万人に上る学校不適応の高校生と 150 万人に近い引きこもり予備軍生徒・学生の様相を指摘し，思春期青年の人間関係構築能力の育成は喫緊的な課題であるとした。また，深化・促進すべき人間関係を４類型（学び合い・高め合い・支え合い・創り合い）で設定するとともに，教師サイドの協同性の手掛かりとしてチームガイダンスと組織的な連携の枠組みを検討した。

第２章（研究２）の前半部分では高等学校特別活動の実践例を５例検討し，生徒集団が編み出す協同性について検討した。それを踏まえて後半部分では，協同的活動の拠り所となる理論的枠組みをアドラー派の共同体感覚理論及びヴィゴツキーを源流とする活動理論の最新研究におき，特別活動の指導理論として再構築した。

第Ⅱ部は開発的研究である。第３章（研究３）と第４章（研究４）から構成されている。第３章（研究３）では主として教科外教育（道徳・総合的な学習の時間・特別活動）の授業時間で実施する協同性プログラム（以後，CGW プログラムと呼称する），これを包括する CGW カリキュラムの開発に取り組んだ。CGW とは collaborative　group　work の略称で，課題グループ（Task Group）から援用した課題解決的なグループワークを整備したものである。最終的に５年間（高校３年間＋前後１年間）のカリキュラム内容構成表に集約した。

第４章（研究４）では CGW 授業（CGW プログラムを実施する 90～100 分の一連の授業構成）の全体構造をガイダンス機能の充実という観点から検討した。その結果，CGW 授業は，①グルー

ピング→ ②アイスブレーキング→ ③CGW プログラムの実施→ ④フィードバックと構造化された。また，CGW プログラム自体の進行過程は，①個人検討→ ②相互検討→ ③個人検討（最終）の往還と明確化された。これを踏まえて４種類（学び合い・高め合い・支え合い・創り合い）のグループワークを各２例，計８例作成した。

第Ⅲ部は実践的（実験・検証）研究である。第５章（研究５）と第６章（研究６）で構成されている。第５章（研究５）では，思春期青年に対して CGW プログラムを用いた実験授業を３例実施した。実験授業Ⅰでは中学３年生３クラス 120 名に高め合いのグループワークを行い事前・事後での生徒評価の上昇や肯定的な相互評価ライン 81 本（68.1%）を得た。実験授業Ⅱ－①では高校３年生１クラス 29 名に上記とは異なる種類の高め合いのグループワークを行った。その結果，グループダイナミクスに関する資料や事後検討会での参加教員の肯定的評価を得た。実験授業Ⅱ－②では大学１年生１クラス 24 名に支え合いのグループワークを行い，肯定的な相互評価ライン 76 本（86.31%）を得た。

第６章（研究６）では，教職課程の学生２～３年生と現職教員を対象に，CGW プログラムを用いた集中講義と講習会を実施し，その結果を考察した。集中講義は学生 53 名に４日間，４種類計６回の CGW プログラムを行い，プリ・ポストテストの上昇や相互評価及び作品（ポスター）などの多面的な評価資料から一定の効果を析出した。一方，講習会では５年間で計９回，計 319 名の教員に対して２種類の CGW プログラムを実施した。合計 2620 件のコメントを内容分析（Content Analysis）的手法で分類・解釈するなど，質的・量的分析から重層的な検討を行い，教員集団の協同性に対する意識改善と実践的指導力の強化を図った。

本論文の研究上の意義は，思春期青年を対象とした協同性プログラムの開発と実験授業での一定効果の抽出，及び結果としての協同性深化と人間関係構築に関する能力開発の可能性拡張である。さらに教師集団の協同性への認識を促進し，協同性プログラムを学校教育に汎用する手掛かりを得たことである。ただし，反社会的行動傾向にある子ども・若者に対するアプローチの提案や CGW カリキュラムの実働化・定着までには至っていない。CGW プログラムの改良と評価方法の工夫により，協同性深化を示すデータの収集を続けることが当面の課題である。